

知恵の樹

No. 178 2013. 9. 18

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

5年ぶりの文学館に思うこと

守谷 信二

この4月から再任用職員として、5年ぶりに町田市民文学館で仕事をさせてもらうようになって、はや半年が過ぎた。再任用先として文学館を希望した理由は二つ。ひとつは、おそらくもう人生の4分の3は終わったのだから、あとは私でなければ誰もやらないような仕事に微力を尽くしたいという思い。もうひとつは、開館準備に携わった職員として、ご遺族や関係者の方々からお預かりした町田ゆかりの文学資料を、何とか一日も早く公開できるよう整理を少しでも進めたいと思ったからである。

町田の文学館には、故遠藤周作氏の関係資料や同じく芥川賞作家の八木義徳氏、桜田常久氏といった方々、また現在もなお活躍されている森村誠一氏の資料などが寄贈されており、それらは2006年の開館以来、毎年開催されている「ゆかりの作家展」に合わせて、それなりに整理もされている。しかし、そうした主要な文学者以外にも、地域の文学館として大切にしなければならぬ作家等の貴重な資料が、数多く寄贈されている。それらはほとんど手付かずのまま、地下の貴重書庫に眠っているのである。そんな中からいくつかを紹介したい。なお、物故者については文中敬称を省略させていただく。

① 青柳寺・八幡城太郎文庫

日野草城門の俳人であり、相模原市上鶴間の古刹、青柳寺の住職でもあった故八幡城太郎が、昭和28年に創刊した俳誌「青芝」は、彼の人柄を慕うたくさんの文学者に支えられ、一結社誌を超える地域文芸誌のような趣を備えていた。当時の青柳寺はあたかも“文学サロン”の観を呈し、定期的に催される句会には、当時の錚々たる作家、研究者などが顔を揃えていた。

城太郎没後、寺の書庫には交友のあった文学者の著作、原稿、書画、書簡類がそのまま残されていたが、ご遺族のご厚意でそれらすべてが文学館に寄贈されている。その一部については、2008年の「八幡城太郎と俳誌『青芝』の人々展」で紹介されたが、大部分はまだ未整理のままである。

② 昭和を代表する作詞家・宮川哲夫の関係資料

いま50代以上の方なら、「街のサンドイッチマン」（鶴田浩二）、「赤と黒のブルース」（同）、「ガード下の靴みがき」（宮城まり子）、「夜霧の第二国道」（フランク永井）、「好きだった」（同）、「東京ドドンパ娘」（渡辺マリ）、「湖愁」（松島アキラ）、「美しい十代」（三田明）、「霧氷」（橋幸夫）など、昭和30年代から40年代にかけて一世を風靡したこれらの歌謡曲に聞き覚えがあるはずである。それらを作詞した宮川哲夫は、もと小学校の教員で昭和25年に当時の忠生村立忠生小学校に赴任し、その後8年ほどを忠生村木曾に住んで教師の傍ら作詞活動に励んだ。

そんなご縁で、奥様が大切に保管されていた膨大な歌詞草稿（子どもたちの答案用紙の裏に書かれたものなど）、日記、レコード、ヒット曲のトロフィーや賞状などが、2003年に市に一括寄贈されている。2004年には、中央図書館で没後30年を記念する展覧会を開催したが、遺品の一部をご紹介しただけで、宮川の人柄や業績を偲ぶ本格的な展覧会は、いずれ文学館が開館してからということで、そのまま現在に至っている。ちなみに来年は彼の没後40年に当たる。

③ 白秋門下の若林牧春・薮田義雄・下村照路

本町田に生まれ八王子の小学校長などを歴任し、

北原白秋が多磨短歌会を興すと最古参の弟子として八王子支部結成に尽力、都立町田高校をはじめ市内小中学校の校歌の作詞なども多数手がけた若林牧春。また、小田原にいた白秋を訪ねて師事し、自身も詩人の道を歩むことになる藪田義雄。さらに、やはり白秋門下で短歌誌「かがりび」を主宰するかたわら、町田地域の郷土史研究の草分け的な存在でもあった下村照路(郷土史では下村栄安)。

こうした地域の先人の仕事についても、いまのうちにできるだけ調査をし、集められる資料は収集しておきたい。特に下村が残した数百冊の地域資料ファイルが文学館にあるが、町田を知る上で大変貴重なものである。

④ 高垣葵氏の放送ドラマ脚本資料

『怪傑黒頭巾』や『まぼろし城』など戦前の少年小説の作者として知られる高垣眸(ひとみ)の二男、高垣葵(まもる)氏は現在も市内にお住まいだが、テレビ放送草創期のドラマやラジオの脚本家として、またのちに演出家としても活躍されている。昭和34年から38年までNHKテレビで放送された「ホームラン教室」や「1丁目1番地」、民放ラジオの「高丸菊丸」、小沢正一・中村メイコで人気を博した「パパ・いってらっしゃい」などの原作・脚本を手がけられた。文学館には、ご本人が保存されていたこれらの放送台本等が寄贈されているが、これもまだ未公開である。

⑤ 西村宗氏の漫画原画

市内在住の漫画家、西村宗氏が昭和55年から産経新聞朝刊に30年間連載した4コマ漫画「サラリ君」や、週刊読売に掲載された「アッサリ君」などの膨大な原画をご寄贈いただいている。これも早く市民の方々にご覧いただけるようにしなければならない。

他にも資料こそわずかだが、幻想的な作風の小説で知られ日本探偵作家クラブ賞や泉鏡花文学賞を受賞し、全9巻の全集もある作家、日影丈吉。彼は、フランス料理の研究、指導にも携わり、わが国フランス料理界の名料理人たちを大勢育てたことでも知られる。また、相原に隣接する旧津久井町

川尻に生まれ、大正から昭和にかけてベストセラーを次々に送り出した大衆小説家、加藤武雄。八木重吉の処女詩集『秋の瞳』の出版にも尽力した加藤なども、地域の文学館としてぜひ光を当てたい存在である。

まだある。江戸後期の俳人、五十嵐梅夫・浜藻父娘のことである。現南大谷に生まれた梅夫・浜藻は、小林一茶や夏目成美といった当代一流の俳諧師たちと親しく交わり、あしかけ5年にも渡る西国俳諧行脚の成果を『草神楽』(和本6巻)、『八重山吹』(同2巻)にまとめ、京都の書肆から公刊している。

刊本が富山県立図書館と岡山市立中央図書館に所蔵されている『八重山吹』は、昨年12月に熱心な町田の市民グループと文学館の協働事業として、館から翻刻刊行することができた。これは浜藻が、各地の女流俳人と巻いた連句を天・地2巻本にまとめたものだが、近世俳諧史上に特筆されるべき女性だけの連句集で、長らく公刊が待ち望まれていたものである。

幸い刊行後には地方からの問い合わせもあり、つい先日は『八重山吹』を手にした広島の研究家から、文化文政期の著名な漢詩人、管茶三(門人に頼山陽や北条霞亭など)を梅夫・浜藻父娘が訪ねており、茶三にはそのときの浜藻を詠んだ漢詩作品も残っていることなどを知らせるお便りをいただいた。文学館が開館当初から掲げた「市民の文学活動の拠点」という理念が、まさに具体的な形で実を結んだ一例である。

いま市民グループの方々とは、月2回のペースで梅夫が編んだ『草神楽』の翻刻に取り組んでいる。『八重山吹』に比べると数倍のボリュームになるが、これも近い内に全巻を文学館から刊行したいと考えている。

これらの資料は、興味・関心のない人間にとっては、ただのガラクタにすぎないものかもしれない。しかし、ヨーロッパなどを旅すると、名もない小さな町や村にも、その土地にゆかりのある人物のささやかな記念館や博物館が、熱心に運営されていたりする。それが、地域のアイデンティティの源泉になっているようである。文化の保存や継承などというのはそうしたもので、大切だと思える人間が、こつこつ

と取り組むほかはないのである。関心のない向きには、どうか邪魔だけはなさないように、それだけをお願いしたい。

文学館に戻って一番強く感じるのは、やはり職員の忙しさである。どの職員もひとり何役も受け持ちながら、日々目の前の仕事をこなすのに汲々としている。それとともに、文学館とは果たして何をするとところなのかという本質的な問いを、職員自身が自問自答する時間も機会も、だんだん減っているような気がしてならない。

ともすると入館者数や観覧者数に一喜一憂し、一時の話題を攫いそうな企画に目が行きがちである。地域の文学館として取り組むべき地味なテーマや対象は、そうした喧騒の中にかき消されてしまうようなところがある。文学館が果たすべき役割は、しっかりと押さえた上で、新たな試みに挑戦すべきではないか。そのためには、もう一度文学館の理念や目標とは何かをまず職員が共有し、それを市民に提示して、館の運営の指針とすることが急務だと思う。

こうした傾向は、文学館に限らず図書館の世界でも同じなのではないだろうか。いま話題の佐賀県武雄市の図書館などにも、何か地に足の着いていない危うさのようなものを感じる。むろん地方都市の

現状は、首都圏に住むわれわれの想像をはるかに超えた深刻なものでしょう。図書館や博物館、文学館といった施設が、その町の「活性化」に一定の役割を果たす可能性や意義も否定しない。しかし、それが目的となって、本来の役割や機能が蔑ろになってしまうのでは、本末転倒である。

かつて鳴り物入りでマスコミや業界を賑わわせた「画期的な図書館」が、いまその名前さえ聞かれないという事例を、5年後10年後にまたひとつ積み重ねるだけなのではなからうか。「空騒ぎ」が過ぎ去った後は悲惨である。その時、果たして誰が責任を取るのだろうか。

図書館や文学館は、市民ひとりひとりの感性や思考に働きかけることを通じて、結果としてその町を豊かで活気あるものにするのである。それは、一見平凡な日常業務の、果てしない積み重ねでしかない。そういう存在を市民生活に不可欠なものとして認め、一定の資源を投入することを許容する社会が、成熟した市民社会というものなのではないだろうか。

図書館とは、また文学館とは、果たして何をするとところなのか。そういうことを改めて自問しながら、いくらかは柵から自由になった心と身体で、志を高く掲げて仕事をしたいものだと思う。(会員)

第3回 まちだとしょかん子どもまつり 実行委員会 始動!

町田市立図書館と市民ボランティアとの協働で開催している今年度の表記祭りは、3月27日(木)～30日(日)の4日間、町田市立図書館全館(含・文学館)で開催されることになった。子ども達にとって身近な図書館が祭りに加わることで、図書館に関心を持つ子どもも増えるのではと期待される。

7/16(火)、図書館よりの祭りへの参加呼びかけに応じた12団体による実行委員会が生まれ、8/20(火)全館児童担当者列席の下、各館からの希望会場・日時の調整等の一覧表が配布され、事情説明がなされたが、超多忙な中で、市民からの要望を受け入れて開催して下さることに感謝したい。その後実行委員会スタッフにつ

参加団体と委員名 (*コア)

おはなしはすの実 福田淑子
おはなひもへえ 畠中恭子
びっぴのくつした 武田祐子
マザーリーフ 青山タエ
柿の木文庫 谷釜房子
桃の木工房 谷川道子

町田ブックトークの会 丸岡和代(*
野津田・雑木林の会 久保礼子(*副委員長)
かえで文庫 砂川とき江(*
町田の学校図書館を考える会 清水陽子(*
町田の図書館活動をすすめる会 玉目哲廉(*
NPOまちだ語り手の会 増山正子(*委員長)

いて話し合わせ、正・副実行委員長、コアスタッフ4名を選んだ。

9/17(火)には、あらかじめ各団体より出されていた希望企画日程を調整して、あらかた4日間の全体スケジュールが決まった。地域館では、お話を主として開催、中央ホールや文学館では、外国の方による自国の絵本読みや、ビブリオバトル、中・高校生や大学生を誘う催しをやりたいねと、昨年同様祭りの予算は零だが、知恵と工夫で何とか楽しい催しにしたいと話し合っている。

すすめる会恒例の広瀬恒子さんの「どの本読もうかな?!」の講演会も、30日午前に開催が決まった。

市民と図書館の協働により行われるこの事業は、中央図書館の児童担当職員が事務局を一手に担って下さっていることで、前に進んでいける。皆さんからも、祭りに関する要望をどしどしお寄せいただければと思う。(増山)

絵本“小さな郵便飛行機”と図書館

武雄市図書館歴史資料館を学習する市民の会 井上一夫

もう40年も前のことだが、私はその当時福岡市に単身赴任(はかチョン)していた。長女が保育園の年少児クラスのヨチヨチ歩きの時分で、その当時旧建設省の営繕部建築課は、九州管内の公共建築や種子島の宇宙開発センターなどの

設計に追われ、月に一回程度家庭に帰ることが常態化していた。その“はかチョン”状態の中で、ヨチヨチ歩きの娘は私の顔を見るなり泣きだす始末で、膝に乗るようになるまで

に妻や義母の介添えが必要であった。離れでうたた寝をしていると、娘が一冊の絵本を抱えて上がってきた。絵本を差し出し読んで欲しいのしぐさをしながら膝に乗ってくる。2~3回繰り返し読み聞かせの後に母屋に還って行ったが、30分も経たないうちにまた同じ絵本を抱えて上がってきた。

その絵本が“小さな郵便飛行機”で、その絵柄やペドロという名前をうっすらと思いだす。その時なぞ娘はこの絵本を繰り返し読むことを求めるのか?毎日顔を合わせることが出来る父親を求めているのだろうか?と考え、少し感傷的になったのを覚えている。

それから5年ぐらいの時間が過ぎ、武雄市文化施設群構想PJを知ることになり、娘が小学校入学直前に国家公務員から転勤のない武雄市役所職員になることを決めた。

今年のお盆に娘二人夫婦と孫たちと食事に出かけ、建設省を辞めることを決めた絵本の事を話した。妻も娘たちもへ〜っという感じで聞いていたが、この絵本の事は娘二人もよく覚えてくれていた。

昨年10月31日、改修のため閉館直前の図書館を保育園の子どもたちと訪ねた。多分2度と訪れることにはならないと予想しながらの訪問である。少し目を赤くした児童司書さんがすぐに子どもたちの傍に来て“おはなしのへや”の準備をしてくれた。ふと眼を移すとすぐ横の児童コーナーにベビーカーを



止めた一組の親子が本を探していた。(写真)

許しも無く写真を撮らせていただいたが、私には図書

館児童コーナーを象徴するかけがえのない構図の1枚になった。おかあさんが本を読んでいる、ベビーカーの赤ちゃんはジ〜ッと見ている、刷り込みが始まっているのである。おねえちゃんは、絵本の表紙を触りながら移動している。

未だ読む年令に達していないようだが、来年には直ぐ後ろのテーブルに絵本を運び読み始めるだろう。

このような静かな時間と空間が図書館に在る・親子

に必要であることを、武雄市長や教育委員会の人たちは理解していないだろう。一冊の絵本がきっかけで男の仕事が変わり、家族の安寧を招く方向を示唆してくれる、そのような人生の転換を教えてくれるのも、図書館力・本の力である。私は微力だが、武雄市図書館・歴史資料館の復権に人生最後の時間を使うことを決めている。単なる正義感でこの仕事を決めたわけではない。ただ、コーヒーが飲めれば楽しい、市外から人が沢山訪れれば「図書館ニューモデル」だ!と喧伝する。その表層的な図書館観を持つ、政治・行政やメディアを変えなければ、子どもたちの育ち・次代が危ういと思っているだけである。(図書館友の会全国連絡会会員)

図書館に関心のある方なら、佐賀県武雄市の図書館指定管理者 TUTAYA 問題には既にご存じだろう。

執筆者井上一夫さんは、『50年後に楽しみを得たければ木を植えよ、100年後に楽しみを得たければ人を育てよ』と武雄市先代市長たちが文化施設群構想を発表し、まちづくりは人づくり、『教育は100年の大計』と70年代から始められた武雄の人づくりPJは、国内トップクラスの武雄市図書館・歴史資料館を生み出した。だが40年過ぎた今、今までの政策経過、図書館・歴史資料館のあり方、歴史資料の評価、景観形成、建築評価、施設を次代に継承する責任、等などの知的議論は全く行われないうまま、トップの恣意的政策(思いつき政策)で、暴走しながら武雄市民の知的基盤を崩壊に向かわせている」として、図書館友の会全国連絡会 ML に現場からの声を発信し続けておられる。この記事は、とともれんML上の文章の転載をお願いしたところ短い時間で新たに書いて下さったものである。(M*)

鈴木 薫

2013年8月某日。都立H高校の司書教諭である私は、教職員研修センターで「読書教育」という題材の研究を受けた。正確に表記するならば、受けさせられていた。2012年8月某日も同様である。自主的にではなく、強制的に参加していたのである、という点を強調したい。なぜ強制的に参加させられていたのか。本校における「読書未読率」が、達成目標値の倍以上であるからだ。

平成21年3月、東京都は「第二次東京都子ども読書活動推進計画」を発表。その中で、高校2年時における未読率(1か月に1冊も本を読まなかった生徒の割合)を「23.9%」にしようと目標値を掲げた。しかし、私が勤務する中堅進学校の都立H高校では、この未読率調査の結果が例年60%程度を推移している。つまり、先述した研修というのは、「未読率が高いのは、先生方が図書館の利用方法がわからないからかもしれないから、他校の実践例でも聞いてごらんください」という善意の企画なのである。

だが、果たして他校の実践例を聞いて、本校にあてはめれば未読率は改善されるのだろうか？ 問題の根幹として、なぜ本校の未読率は改善されないのだろうか。都立高校において、どのような読書事情があるのか、数回にわたって都立H高校の図書室を例に内情を書き記してみたい。

都立H高校は、山手線の内側にある中堅進学校である。昨年、司書が退職となったが、理解ある管理職の尽力により委託を免れ、新しい司書さんが異動してきた。(東京都では学校司書の新規採用を行っていない。退職した司書の学校から順次、委託業者が導入される流れの中で、この人事は快挙である)斯く言う私は、H高校で司書教諭をしている。今年で3年目となった。

蔵書数は実質1万5千冊前後。席数は40席程度。小規模な図書室である。

ところが、中学生が高校見学に来てこの本棚を見ると「すごい！ たくさん本がある！」

「毎日、いつでも開いているんですか！」いうのだから、こちらが驚いてしまう。もちろん、私立高校見学で目が肥えていたり、中学校でも本校より蔵書数が多かったりする学校はあるのだから、実質として驚嘆している中学生は一部で、こちらの目がついてしまうだけなのではないかと思いたい。

この驚いてくれる中学生が、仮に本校に入学してくれたとして。では、“すごいたくさん本のある、毎日いつでも開いている図書館”に来室して本を読んでもくれるだろうか。想定される答えは、否である。こちらが想定する以上の学校図書館愛用者ならば、来室してくれるかもしれないが、一般的な高校生は、入学直後の図書館ガイダンスの後、授業で利用もしないかぎり、3年生になっても来ないかもしれない。その推測は、本校図書館の立地条件とカリキュラムに基づく結論だ。

まず、本校の図書室の立地。教室棟とは別エリアに属する3階にある。特別教室棟の一部だが、教室移動での動線には入らない。つまり、教室で主生活を行う生徒の目に入らないのだ。(『学校と社会』を記したジョン・デューイは、図書館はあらゆる教室からいける場所に置くべきだと述べていたかと思うが、まったく逆行しているのが現状である)

では、これをどのように解決すべきか。答えは、「授業を図書館で行い、強制的に図書館を動線に入れて、利用させよう」である。先に述べた読書教育の研修でもつまるところ、如何に図書館を授業に取り入れるかという内容であった。ならば、国語でも社会でも、どんどん図書館を使えばいい。と、読者の皆さんは思われるだろうか？ ここが、一番の課題なのである。 -次号に続く- (会員)



図書館での企画 「本の展示」

さるびあ図書館 石井 一郎

さるびあ図書館では、毎月、職員が交代で企画をし、新着図書の隣の書架を使って本の展示を行っている。9月3日から1か月は、スポーツ祭東京2013(第68回国民体育大会)の開催を記念して、町田が会場となっている野球・サッカー・バレーボール・バドミントンなどの解説書・エッセイ・小説などスポーツの特集を展示中だ。

このメインの展示のほかに、児童・文学・一般コーナーでもミニ展示を行っている。

9月のミニ展示のテーマは、児童が「虫」から始まって、12日から「芸術」、27日から「方言」、文学が「詩」、一般が「DIY」で、それぞれ配架担当が交代で行っている。

私の担当している児童は、嘱託職員6名と常勤職員2名が2週間ごとに展示を替えている。

私は6月末に「新美南吉生誕100年」をテーマに企画展示をした。読売新聞(4月3日付)に新美南吉の「去年の木」が中国の国語教科書に採用されているという記事を読み、生誕100年を記念して出版も多くされていることから(出身地の愛知県半田市で

もイベントが目白押しである)、新美南吉作品の絵本・童話・紙芝居等を展示したのだ。

展示にあわせて、「ごんぎつね」「でんでんむしのかなしみ」の2択3問のクイズも出し、回答者には、色画用紙で作った「きつね」と「かたつむり」のおもちゃの景品を用意した。クイズはさるびあ図書館で初めての試みで、同僚からは、問題が難しいとか、おもちゃをカウンターに置いたらとか意見をいただいた。カウンターでおもちゃに興味をもった子どもに声をかけてクイズに参加してもらうなど、クイズをきっかけとして、職員と利用者が話せる場をもつことが出来、企画してよかったと思っている。

本の展示は、利用者こんな本もあるのかと発見と驚きを与え、いろいろな本と出合える場にもなっている。企画する職員にとっては、利用者が手に取って来てくれたり、貸し出してくれたりするのがとてもうれしい。

皆さんもさるびあ図書館に来られた際は、展示本コーナーをのぞいて見てください。きっと、面白い本との出会いがあるのではと思います。

(追記)今年8月に半田市の新美南吉記念館へ行った際、「去年の木」が掲載された中国の国語教科書を見ることができた。(会員)

町田の学校図書館を考える会 9月定例会 9月14日(土)14:00~16:00 **報告**

於:まちだ中央公民館6階フリースペース/出席者:谷釜・伴・水越・清水

(1) 「第3回 まちだとしょかん子どもまつり」について

- ・第1回打合せ(8/20/於:中央図書館)の報告。
- ・協議:今年度も科学あそびに関わる講演会と科学あそび体験を企画することを確認。

前回はワークショップでおもちゃを作り遊ぶことが主だったが、今回はより本と結びつけた内容にすること、会の活動の紹介もしっかり準備しよう、という意見が出た。

(2) 2013年度 連続講座について

- ①本の補修
- ②図書館を使った授業
- ③交流会
- ④科学あそび講演会(こどもまつり参加)

の4回を計画。

次回までに講師と日程・会場を調整し、チラシの作成へ。

☆今月の定例会は出席者の都合で午後に変更して行いましたが、通常、毎月第2土曜日午前10:30より、場所は未定で開催しています。

・10月定例会も、親地連の全国交流集会の日程と重なったため→26日(土)10:30~12:00に変更

場所:まちだ中央公民館6Fフリースペース
興味のある方、どうぞお気軽にご参加ください。

問合せ:清水 042-799-0467(Fax 同)

Email:machidagakuto@gmail.com

「野津田公園・上の原の里山環境を市民協働で保全し次世代につなげていくことを求める請願」

意見陳述が行われ、継続審議になりました！

野津田公園に関する表記請願署名（請願者：上の原はらっぱを守るネットワークー同）にご協力いただきありがとうございました。最終、請願署名数は、6619筆でした。

9月13日(金)10時より行われた建設常任委員会での請願の意見陳述には、補助椅子を必要とする程大勢の方(約40名)が傍聴して下さり熱心に審議に耳を傾けて下さいました。

審議は、最初に議会事務局より署名数の発表があり、続いて請願者代表の意見陳述(5分)、それに基づいて、市議員が請願者(陳述者+久保)に質問をするという形で進められ、請願項目にそって答弁。請願者は一般傍聴席に引き下がり、今度は市議員が市担当者に質問をするという流れで、1時間10分ほど審議されました。

主な請願項目

- 1・野津田公園のこれまでの経緯を尊重し、上の原の里山環境を大切に、今後も市民協働で保全と活用を推進してください。
2. 市長が考える里山の定義と、市内で想定している保全対象を明示し、明確で継続的な保全の計画方針を求めます。
3. 「町田市緑の保全と育成に関する条例」(1983年12月24日付け 条例第37号)には、緑の保全と育成に関する重要な事項については、市長は町田市みどり委員会の意見を聞かなければならない(同条例第2条第2項)とされています。市長は、今回のような著しく緑を損なうおそれのある事業及び行為に関することや計画の策定や変更に際しては、上記条例に定められた委員会を速やかに設置し、同委員会の提言に基づいて慎重に調査審議することを求めます。

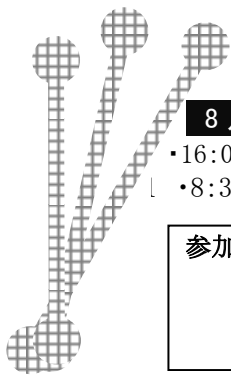
意見陳述の中で、上の原の里山の現在の様子と活用状況についての質問に対して、複数の専門家が、「このような豊かな生態系の原っぱが残っているのは、都内では、もうここだけだ」と発言していること、この原っぱを、現在、多くの幼稚園、小学校が子どもが遊びながら自然を学ぶ場として活用し

ていることを写真を見せ、報告。第二次野津田公園整備基本計画懇談会についても、請願者がこれまでに開催された内容において具体的に問題点を報告すると、「懇談会で議論しているのに、こういう請願が出てくるのは、なぜか」「イメージ図も、基本計画も出ていないと請願者は言っている。それで10月のパブコメは何について市民に聞くのか」「請願者は管理運営について、これまでのボランティアの情報を表に出していないと言ったが、出せない理由があるのか」、等々、大勢の傍聴者に触発されてか、請願者の意向をくんだ質問が市議委員から続きました。市側は、「次回懇談会には、イメージ図と基本計画図を出す」と答弁、しかし「あくまで、計画・策定は行政が決める」と念を押すように繰り返しました。では、市民の意見を聞くというこの懇談会とパブリックコメントの意味は？と、改めて問わざるを得ません。

また、みどり条例において、市長への諮問機関「みどり委員会」を再開してほしいという内容については「作ったときは、経済が右肩上がりで開発が進んでいた。だから、緊急に作った。再開するつもりはない」と答弁、時代にそぐわないという理由で退けられました。しかし、答弁をした公園緑地課・課長がみどり委員会について明らかに誤った報告をしており、それについて、請願者は直ちに訂正を求める所存です。審議の結果、請願は継続審議となり「懇談会を見守る」ということになりました。

次回懇談会は、10月3日(木)です。みなさん、ぜひ、また、傍聴に集まってください。東京で、他にないという生態系豊かな原っぱが、いま、失われようとしています。子どもたちが遊びながら自然を学ぶ場として、町田の宝として、原っぱがいかに大切であるかを伝えていきたいと思います。

なお、継続審議になったので、請願・署名は12月議会までまだ積めます。ひき続き、ご協力をよろしくお願い申し上げます。(久保礼子)



ひろば

8月の例会報告 > 8/21(水)

- ・16:00～ 会報 177 号印刷(伊・玉・丸・増・桃)
- ・8:30～21:30 夕涼み会:くいものや熊

参加者:石井、伊藤、国松、久保、黒田
鈴木、多田、玉目、手嶋、尾留川
前島、前田、増山、丸岡、水越、
三谷、桃澤、山口、吉岡、守谷、

灼熱の日中がほんの少し和らいだ「熊」の和室にて今年を上記の 20 人がつどい、楽しい時をすごしました。毎月の例会に参加の難しい方々もこの日は都合をつけてくださり、思いがけず大盛会となったのでした。日ごろの活動、仕事、興味をもっていることなどを発表していくうちに活発な図書館問題についての意見交換の場となりました。この日「熊」のマスターのお姿の见えないのが残念でしたが、ママさんの心尽くしの料理の数々は美味しかったつぷり、工夫にあふれ記憶に残るものでした。(丸岡)

これからの活動予定

図書館見学

◇10月8日(火)・9日(水) (富山県へ)

- ・小矢部市民図書館「おとぎの館図書室」
- ・舟橋村立図書館

是非ご参加ください。北陸の美味を堪能しましょう!

◇1～3月頃 (岡山へ)

- ・岡山市立図書館 (担当:手嶋)

田井郁久雄さんのご都合を伺って日程調整。

講演会

担当:手嶋

◇市職労と共催で、就労社会問題・労働者問題等について学ぶ。ただ今、講師と交渉中。

予定は、10月頃だが・・・?

◇広瀬恒子さんの講演会「こどもの本新刊本紹介」は、3月30日に開催決定(p3 参照)

悲しいお知らせ 宮崎淳子さんが亡くなりました。

会報作業を終えた先ほど、会員の宮崎淳子さんの訃報が届きました。ご主人からの電話で、しばらくご無沙汰しているけど元気ですか?と聞くと、「元気じゃないんだよ、死んだんだよ...。4月に大腸がんが発覚、良くなって店に出て無理をしたんだと思う。再入院で肝臓に転移していることが分かり、9月16日17時15分に亡くなった...。葬儀は本人の遺志で身内だけで20日に行く...」。

便りが無いのは元気な証拠、というのはウソですね。電話をしても通じないので、元気だとばかり思っていたのですが、電話にも出られず寝ておられたとの事。「ニカス」のHPに載せているという10月2日の「励ます会」は、そのまま「忍ぶ会」として改名して行くとか。あ、辛いなあ!合掌(M4)

2013年度 第7回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

10月17日(木)10:30～11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム (通算77回)

- ・町田ゆかりの作家「加藤武雄」前田久美子
 - ・「黒いブックと白いブック」(コーンウォール昔話)増山正子
 - ・「田の久」(日本の昔話) 蛭田昌美
 - ・「イヤリング」(吉田篤弘) 税所紀子
- 直接会場へどうぞ! 無料 保育有
(町田市民文学館 ☎042-739-3420)

かえで文庫から

伊藤 倭子

成瀬センター建替えのため、昨年4月から元「あおぞら学童保育クラブ」の1室に移動してから1年半がたちました。

狭い部屋ながら、毎週水曜日と土曜日の 14:00～16:30 まで開室しています。

水曜日は下校時間が遅くなったのか、子ども達の来室も少なくなり閉室間際に駆け込んで来ますが、土曜日はまるで自分の部屋のようにくつろいでいる4・5年生の男の子の常連がいます。

来年7月には、センターの工事が始まり、あおぞら学童の建物も壊されるため、文庫の移り先を探していましたが、やっと、新センター完成までの2015年秋までは成瀬中央小学校の中で活動を続けられることになりました。その間、土曜日の開室や他校の生徒の利用が難しくなるのではと懸念していますが、本を置ける場所があり細々とでも継続出来ることはありがたいことと思っています。

去る7月28日には、「新成瀬コミュニティーセンター」についての説明会があり、設計図面を見せてもらいましたが、かえで文庫が子どもフロアと並んでしっかり記されていて嬉しく思いました。

ソフト面の在り様はまだはっきりしませんが、文庫のスペースの中に、図書館の「予約本の自動貸出し機」が設置されるということです。それによって、人々の出入りも多くなり文庫への認識も広がるのでは、とも考えますが...。センターの一部に設置している地域文庫の在り様と、運営の仕方等、いろいろ課題はありますが、良き協働の在り方を模索していこうと思っています。今後ご助言をお願いいたします。

(団体会員)